

さまざまな意味で つくること、命をつなぐこと

we support ↓

RQ
災害教育
センター

MONTHLY

「東北に黒龍を送ろう! 大作戦しんぶん」改め
復興支援『すけさきた』
かめばいん

「すけさきた」とは
宮城県登米市あたるの言葉で
「ボランティアに来たよ」という
意味である

NOVEMBER
11
2013

南三陸町歌津中学校避難所。まだ戸外で雪の舞う避難所には、数百人も人が集まり、寒さをしのぐものさえありませんでした。カーテンを外して体に巻き、近くの人に譲ってもらった木材でたき火をしたそうです。夜になると、火の放つ明かりと暖を求めて多くの人が集まってきました。

そして、避難所には水一杯を飲もうにも器がなかったのです。毎日体を使って働く生活を送っていた漁師の小野寺弘司さんは、「箸もコップもないのではわがねえ(ダメだ)」と、避難所にあつたわずかな道具を使って竹で食器を作ろうと思いいちました。

竹林の持ち主に相談して竹を切り出し、最初は仲間4人で、車座になってコップや箸を作り始めたそうです。4人は幼いころから刃物を使う生活をしていたので、造るのは慣れていたし、何かを作っていると気が紛れた、と弘司さん。

当時作った食器を再現してもらっているとき、刃物を使うそばにはかわいらしいお孫さんの姿が。けれど弘司さんは一度も「危ないからあっちへいって」とか「触るな」とかおっしゃりませんでした。お孫さんはただだ、魔法のように滑らかに動く刃先、そこから生み出されるものを面白そうに眺めています。

刃物が生活に便利なもの、そして楽しい思い出につながるものを生み出していく、そんな実感を伴う教育の在り方がそこにあります。また、こうやって、生活に密着した技の伝承が自然に行われていくのでしょうか。

(聞き書きプロジェクトMEMOKOPOログより)

連続セミナー「教育と刃物」@東京 第7回 3.11避難所での物づくり～刃物のチカラ～



死者・行方不明者八百人を超える甚大な被害を受けたこの南三陸町歌津は、古代から続く古い歴史を持つ地域。刃物はもちろんのこと、さまざまな道具を自らの手で作り、大切に整え、使いこなすことが、今も人々の暮らしの原点になっています。

日常・非常時を問わず、何かを生み出すために欠かせないのが道具ですが、小野寺さんたちの行動を見ると、物づくりは単なる「物づくり」に留まらず、自分を取り戻し、人を癒し、仲間をつくるという生きる力の根源、あるいは人間がそもそも持つ本能だといえそうです。



避難所では、徐々に「つくる人」の輪が広がり中には工夫してコップに取っ手をつける人も現れた
出来上がって行くことの喜び、培った技術を活かす喜び、仲間と工夫しあう喜びが、
極限状態での「生きる力」の源になる

飲み口と底にナタで面取りを施した「コップ」
震災から2日後までに60個を作り上げた
(名前を書いて『マイコップ』にした様子も再現)
箸はコップよりも時間をかけて削りだしていた
(Youtube『歌津・津波直後に竹での食器づくり再現』)

開催日程:12月7日(土)

第一部 初心者向け『クロモジの楊枝づくり』

講師:関根秀樹氏 14:00~15:20

第二部 トークセミナー『3.11避難所での物づくり』

ゲストスピーカー:小野寺弘司氏 15:30~17:30

会場:日本エコツーリズムセンター(東京都荒川区)

tel 03-5834-7966 fax 03-5834-7972

JR西日暮里駅徒歩3分(日能研ビル2F)

参加費:1500円

東京にお越しのかた、ぜひのそいでみてください!